

小学校教員養成における歌唱指導の考察 (2)

坂本久美子

A consideration of Singing Instruction in Elementary Teacher Training Course (II)

Kumiko SAKAMOTO

1. はじめに

平成 29 年度改訂の小学校学習指導要領【音楽】では、表現における歌唱や器楽における技能の修得が明文化され、将来教員を目指す学生にもそれらの修得が求められると予測される。そこで筆者は、小学校教諭一種免許状取得の必修科目である「初等音楽Ⅰ」の履修者を対象に歌唱についての意識調査を行い、学生の苦手意識や課題を見出し、教員養成における発声指導の内容について考察した¹⁾。中でも特に姿勢や呼吸に着目し、体操やストレッチなどの動きを用いて歌う姿勢に効果的な支えと脱力の感覚をつかむことや、腹式呼吸に必要以上にとらわれず、まずは息を吐き切ることや、その後に入ってくる深い息を自分の体を通して認識する重要性を感じた。近年教育現場では、歌唱活動は音楽科の授業だけでなく、特別活動や学校行事として多く取り入れられている。ベネッセ教育総合研究所が行った「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)〔2010年〕」によると、特別活動における合唱活動に該当する活動として、中学校では合唱コンクール等が86%、小学校では音楽祭や文化祭が86%実施されている²⁾。この度筆者は、本学の卒業生であり小学校教諭として勤務しているS教諭から6年生の全体合唱の指導について相談を受けた。本研究では、S教諭へのインタビューから、小学校教諭の合唱指導における課題を見出し、「初等音楽Ⅰ」の授業内容の振り返りと共に、歌唱指導における改善点を考察した。

2. 「初等音楽Ⅰ」の授業内容

本学は、初等音楽科関係の科目として、「初等音楽Ⅰ」及び「初等音楽Ⅱ」、「音楽科教育法」を開講している。「初等音楽Ⅰ」では表現領域の【歌唱】と【音楽づくり】、「初等音楽Ⅱ」で表現領域の【器楽】及び鑑賞領域を扱っている。ここでは、筆者が担当する「初等音楽Ⅰ」の【歌唱】における授業目標及び内容を振り返る。なお授業内容は、S教諭が履修した平成24年度のものである。

1) 授業目標

【歌唱】に関する授業目標は、

- ・各自の歌唱力を高めながら、声を合わせる楽しさを感じる心を養う。
- ・小学校音楽科の中で、歌唱の果たす役割を知り、児童期の心身の発達を踏まえた歌唱指導を学ぶ。

の2点である。「初等音楽Ⅰ」の履修者のうち約三分の二は1年次に「幼児音楽Ⅰ」を履修し、子どもの歌やあそびうたを歌い、声を出す経験を積んでいるが、発声や響きのある声について知識や技能を十分には得られていない段階である。また、三分の一は歌唱系の授業は初めての学生であるため、具体的な発声法を学び自身の声を知ることを第一の目的としている。その上で、人と声を合わせる心地よさを感じ、ハーモニーを創る楽しさ、すなわち「ハモッて気持ちよい」感覚を味わえるようにする。また、履修時の2年生前期はまだ小学校教育実習を経験しておらず、児童の姿をイメージすることは難しい。この授業では、自分たちが実際に歌唱したり演奏したりしながら、教材についての理解を深める。また、学習指導要領の概要を知り、各学年の歌唱教材の構成を学ぶ。様々な歌唱形態や歌のジャンルを知ること、学習指導要領にある「自然で無理のない、響きのある声」で歌うこととはどのような歌唱なのかを考える機会とする。また、変声期を迎える高学年への配慮や指導法を知る。

2) 授業内容

15回の授業内容は、〔表1〕のとおりである。

12回までは毎時間2曲ずつ、共通歌唱教材を歌う。また、毎時間の授業の最初に、背伸びや肩・首のストレッチ、軟口蓋を開く手がかりとなる眉上げや、規則正しい呼吸の繰り返しや息によるリズム打ちを行う。発声練習としては、母音による定型パターンが一般的であるが、機械的・義務的になる傾向がある。また、日本語の歌唱について藍川は³⁾、日本語のニュアンスを伝えるためには一つの母音について、少なくとも3つの発音があるとしており、母音だけを強調する歌い方では日本語が伝わりにくくなると警鐘を鳴らしている。そこで、発声練習としては、母音唱にこだわらず、まずは楽しくのびのびと声を出すことを目的とし、それにふさわしい教材を使用し、声のウォーミングアップを行った。「おなかの体操」(楽譜1)は、順次進行できており、スタッカートで歌う場合の息や身体の使い方を意識させるのに適している。さらに音域を上げていくことで、高音域の練習にもなる。

作詞/作曲 鎌田典三郎

(楽譜1)「おなかの体操」

また、歌唱教材は日本語の歌詞であることから、歌唱時の声だけでなく、日本語の発音も意識する必要がある。日本語は一つの子音+一つの母音が基本であり、一つ一つの拍は母音で終わるという基本的な性質を持っており、開音節言語といわれる⁴⁾。五十音は誰もが小学生の頃から慣れ親しんだ日本語の基礎である。この五十音を横に読むと、母音の響きが同じ文字が並ぶ。それを発声時の口のあけ方の練習用に、メロディーを付けたのが「あかさたな」(楽譜2)である。ア段からエ段、イ段、オ段、ウ段へと、口の形が変化し、口中の空間の変化を感じられるのではな

[表1] 初等音楽Ⅰ 授業計画

回	教材	活動内容	共通歌唱教材	
1	「ぞうさんのさんぽ」	教科書の絵から歌を探そう	1年	「ひらいたひらいた」
	「じゃんけんぽん」	うたってあそぼう		「かたつむり」
2	「ぶんぶんぶん」	リズムと言葉であそぼう		「うみ」
	「そろそろはるですよ」	言葉を大切に歌おう		「ひのまる」
3	「たぬきのたいこ」	2拍子と3拍子の違いを感じよう	2年	「かくれんぼ」
	「はしの上で」			
4	「かぼちゃ」	音が重なっていく面白さを感じよう		「むしのこえ」
	「ドレミのうた」	絵譜（ドレミの体操）		「はるがきた」
5	「えがおできょうも」	身振りを付けて楽しく歌おう		「夕やけこやけ」
	「海風きって」	カデンツ創作をしよう		「春の小川」
6	「あの雲のように」	互いの音を聞きながら演奏しよう	3年	「茶つみ」
	「きょうりゅうとチャチャチャ」	チャチャチャのリズムに乗って歌おう		「うさぎ」
7	「バードウォッチング」	節の違いを感じよう		「ふじ山」
	「音のカーニバル」	拍を感じて音を組み合わせよう		「とんび」
8	「ゆかいに歩けば」	音を聞き合って合わせよう	4年	「まきはの朝」
	「冬の歌」	曲の感じを生かして演奏しよう		「もみじ」
9	「こきりこ」	日本の音楽の雰囲気を感じ取ろう		「さくらさくら」
	「いつでもあの海は」	節の重なり方に気をつけよう		「こいのぼり」
10	「ビリーブ」	曲想について考えよう	5年	「子もり歌」
	ゴスペル、ヨーデルなど	世界の歌を聴こう		「冬景色」
11	「アリラン」「茉莉花」	5音音階を感じよう		「スキーの歌」
	「こげよ マイケル」	ゴスペルを歌おう		「おぼろ月夜」
12	「越天楽今様」	雅楽について知ろう	6年	「われは海の子」
	「箱根八里」	いろいろな歌唱形態を知ろう		「ふるさと」
13	「星の世界」	アカベラ（グループ）で歌おう		混声三部合唱曲 選曲
		独唱曲の復習、グループ活動唱①		混声三部合唱練習
14		独唱曲のテスト、グループ活動唱②		混声三部合唱練習
15		グループ活動唱③		混声三部合唱発表

いかと筆者が考案した。また、各段の中で、k・s・t・n・h (f)・m・y・r・wの子音を口腔内のどこでどのように発音しているのか感じ取るよう促す。聴唱法で歌うことを基本としているため、聴き取って覚えやすいように旋律は順次進行を基本とし、ア段の旋律の動きを一音ずつ下げながらそれぞれの段で歌えるよう和音進行を工夫した。五十音最後の「ん」については、口を閉じて発音する「m」の場合と、口を閉じずに発音する「n」の場合がある。日常会話では無意識であるが、「ん」が一音符で歌われることの多い日本語の歌では、美しい日本語を伝えるためにはこれらを判断し歌うことが求められる。その仕組みをこの練習曲を用いて学習する。

作曲 坂本久美子

あ か さ た な は ま や ら わ え け せ て ね へ め え れ え
い き し ち に ひ み い り い お こ そ と の ほ も よ ろ を
う く す つ ぬ ふ む ゆ る う ん ん ん

(楽譜 2)「あかさたな」

「早口言葉の歌」(楽譜 3) は、よく知られている早口言葉を歌詞にしているが、速く歌うことが目的ではない。口腔内における子音の発音される場所を意識し、息の流れを遮らず子音を明確に発音することを目指している。子音 n や m を意識する「なまむぎなまごめなまたまご」の他にも、「新設診察室視察」や「企画か価格か企画局」など、意識する子音を s や k などに替えて歌う。発声練習の曲は、いずれも敢えて聴唱法で指導している。聴く活動は音楽活動の基礎であり、学習指導要領でも読譜の技能を修得するまでの低学年では、範唱を聴いて歌うことから始めるとある。人は成長と共に、情報を聴覚より視覚に依存するようになるが、発声練習では自分の声に集中できるよう、視覚的な情報をできるだけ少なくしたいと考えている。

詞 日本伝承
作曲 横山太郎

な ま む ぎ な ま ご め な ま た ま ご な ま む ぎ な ま ご め な ま た ま ご
な ま む ぎ な ま ご め な ま た ま ご な ま む ぎ な ま ご め な ま た ま ご

(楽譜 3)「早口言葉の歌」

以上のウォーミングアップの後、各回の活動に入る

- ・ 1～4 回 (低学年課題)

毎時間共通歌唱教材を 2 曲ずつ取り上げ学習し、次の時間の最初には当番である伴奏者と指揮者の 2 名のリードでもう一度歌い復習する。2 拍子と 3 拍子の指揮を「ひらいたひらいた」「うみ」で学習し、「かくれんぼ」では前半の軽快な音楽と後半の滑らかな音楽の違いが、指揮によって表せるように学ぶ。みんなの前で指揮をすることで、前奏の始め方や、歌が入るための合図や曲の終え方など、実践的な指揮の仕方を歌の復習と共に各自が体験する。わらべうた「ひらいたひらいた」は五音階であり、曲も短く覚えやすいため、輪唱やオスティナートを加えることで、音の重なりも味わいながら発声練習の教材として活用できる。低学年の教材では、幼児期との連続性を考えながら、教科書のイラストから童謡を見つけて歌ったり、「じゃんけんぽん」や「えがおできょうも」など、身体表現しながら歌ったりする。「かぼちゃ」では、歌いながら拍を感じて手拍子を重ねる活動を行う。

- ・ 5～8 回 (中学年課題)

「うさぎ」や「さくらさくら」では、都節音階による日本の旋律を味わって歌う。「茶つみ」は手合わせうたとして馴染みのある曲であるが、聞き覚えに頼らず楽譜で音程を確認しながら正確な旋律を歌う。二部合唱「もみじ」は、輪唱から同じリズムによる重なり、異なるリズムによる重なりへと合唱の様式が変化していることを踏まえ、中学年の歌唱教材の意義を理解する。「ゆかいにあるけば」は、スタッカートで軽快な歌い方が、うきうきした気分を表している歌である。曲の後半は、長3度、完全4度、完全5度、長6度と、次第に跳躍の巾が広くなり、高音部を頭声発声によって遠くに飛ばす感覚をつかむのによい歌であるため、ウォーミングアップにも用いる。「きょうりゅうとチャチャチャ」「音のカーニバル」では、打楽器を用いてチャチャチャの雰囲気高めたり、歌のない部分の拍を打楽器演奏することで音楽の連続性を感じたり、歌唱活動の活性化を図った。「こきりこ」は、ヴォイスパーカッションでリズムを取りながら無伴奏で歌い、通常の歌唱と異なる民謡の歌い方や、声を楽器のように使うヴォイスパーカッションを経験する。

・9～12回（高学年課題）

高学年の共通歌唱教材は、四季すべてを網羅しており、自然の情景をイメージしながら歌うよう指導する。その際「こいのぼり」「冬景色」「われは海の子」などは、現在の学生達の生活経験にはない描写や言葉使いによる歌詞が難しいため、言葉の解釈や説明を丁寧に行う。「こいのぼり」の付点のリズムを明確に歌うことができるよう、まず音程や歌詞を使わず付点のリズムを子音sで発し、腹筋を連動させた横隔膜の使い方を感じる“息のリズム打ち”を行う。「おぼろ月夜」では弱起の曲の歌いだしを、指揮による合図を通して学ぶ。

また、ゴスペルやヨーデル、フラメンコや日本の民謡などを鑑賞し、その歌の成り立ちと共に、特徴ある発声や歌い方を知り、歌声は一つではないことを踏まえ、曲にふさわしい歌い方を考える。「星の世界」では、少人数ではあるが、女声、男声、混声でアカペラ三部合唱を練習し、発表しあうことで様々な合唱形態の声の響きを味わう。高学年では変声期に入る児童もいることから、竹内の変声期のCD⁵⁾を用いて、どのように変声期が進むのかを知り、配慮すべき点を学ぶ。

・13～15回

7名ずつのグループに別れ、合唱曲を選曲し練習する。三部合唱の場合1パートを2～3名で歌うことになり重唱に近いが、各自が自立してパートを歌唱しアンサンブルを作り上げることを目的としている。教科書の他、定番の合唱曲集やポップスを合唱用に編曲した曲集から学生達が自由に選曲する。S教諭の学年では、次の5曲であった。

「オレンジ」(市川喜康 作詞・作曲) 混声三部合唱

SMAPの2003年の発表曲。不器用さゆえに分かれることになってしまった二人の、切ない思いの歌。

「青いベンチ」(北清水雄太 作詞・作曲) 女声二部合唱

高校の同級生で結成した、男声デュオ「サスケ」の2004年の発表曲。明日のクラス会を前に、別れた彼女のことを後悔と共に思い出している青年の歌。

「また会える日まで」女声二部合唱

(アドヴェンチャーキャンプの子ども達&北川悠仁 作詞・北川悠仁 作曲)

男声デュオ「ゆず」の2002年の発表曲。出会った喜びを忘れず、また会える日まで、勇気

を持って一歩ずつ進んでいこうという強い意志を歌った歌。

「空も飛べるはず」(草野正宗 作詞・作曲) 混声三部合唱

ロックバンド「スピッツ」の1994年発表曲。思春期の鬱屈した自分をもてあましていた青年が、〈きみ〉と出会ったことで生きる力を得て、前向きになれた歌。

「愛唄」(G R eeee N 作詞・作曲) 混声三部合唱

男声4人のヴォーカルグループG R eeee N (グリーン)の2007年の発表曲。青年が目の前の恋人に、照れながらも素直に思いを伝えるラブソング。

教材や定番の合唱曲ではなく、ポップスを選ぶグループがほとんどであったのは、知っている曲のほうが歌いやすく、譜読みを避けたい気持ちの表れであろう。しかしそのため、主旋律以外の声部の譜読みや音取は苦勞していた印象である。また、歌詞が学生達の共感を誘う内容であることも大きな要因として挙げられるのではないだろうか。「また会える日まで」以外は、すべて恋愛がテーマであり、学生達が感情移入しやすい題材といえる。耳に残るサビのメロディーと共感できる詞が学生の好みであろう。伴奏の有無は自由としたが、「空も飛べるはず」はアカペラで、他はピアノ伴奏付であった。少人数のため指揮者は置かず呼吸をあわせて歌うことを基本とした。各グループの合唱は15回目に発表し聞き合い、歌い方や表現について意見交換を行った。また、グループ練習の間に別室で一人ずつの歌唱テストを行った。指定しておいた共通歌唱教材5曲の中から、本人が希望する曲を教員の伴奏に合わせて歌唱する。集団の歌唱ではわからなかった個人の歌唱力を知る、貴重な機会である。

3. S教諭の合唱指導

1) 楽曲について

S教諭が、合唱指導について相談したいと研究室を訪ねてきたのは、夏休みの8月のことであった。S教諭が、6年生の合唱曲として選んだのは、「地球星歌～笑顔のために～」(作詞/作曲 ミマス)である⁶⁾。作者のミマスは、ヴォーカルのSachikoと共に音楽ユニット『アクアマリン』を結成し活動している。大学や大学院では自然地理学を専攻し、公務員を経て音楽の道に進む。小学校の頃からプラネタリウムに通い、今でも星や宇宙にとっても興味を持っている。また旅好きで多くの国を旅した経験を持ち、それが音楽作りに大きな影響を与えているという。国立天文台が行うキャンペーン“スター・ウィーク～星空に親しむ週間～”のテーマソングにもなった「COSMOS」(作詞/作曲 ミマス)は、現在小学校・中学校の音楽会や合唱コンクールの定番曲である。「地球星歌～笑顔のために～」は、シベリア鉄道でユーラシア大陸を旅したときの風景が元になっているという。

曲は八分の六拍子・イ長調の流れるような旋律と、ダイナミックなスケールの詞が特徴的である。構成は、A+B(サビ)が2回繰り返され、それまで明るい曲調であったのが、マイナーコードによるCが効果的に挿入され、ドラマティックな転調へと進んでいく。その後再びA+B(サビ)がユニゾンで再現され、最後のフレーズが静かに繰り返され終わる。

まず選曲について、どのような経緯があったのかを尋ねた。S教諭は昨年度の学内音楽会で、6年生が歌う「地球星歌」を聴き、鳥肌が立つ程感動したという。その時は、この歌がどの程度

のレベルの曲なのか、歌うためにどのような技能が必要なのか等は全く考えず、「自分が担当することになったら、子ども達にこの曲を歌わせたい」と強く思ったという。人が音楽や歌を聴いて感動するのは、その演奏が素晴らしいだけでなく、聞き手がそのすばらしさを感じ取る感性や、演奏者の思いを受け取る心の耳を持っていることが重要であろう。S教諭は子ども達の歌唱から、歌詞が心に響き感動したという。S教諭は教諭という立場であり、この日まで子ども達が積み重ねてきた練習の大変さも十分理解しており、心情的に共感する面もあったと推察される。しかしそれだけでなく、合唱という形で音楽と言葉が自身の心を震わせたことを強く自覚している。教材選択で最も大切なのは、教師がその歌に興味を持ち、心が動くことである。音楽や言葉に感動し、その感動を共有したいという思いこそが、歌唱指導の原動力となることを改めて感じた。

2) 指導について

S教諭のインタビューから、指導に不安を感じるポイントは、指揮、発声指導、音楽表現指導の3点であった。

・指揮について

「地球星歌」は八分の六拍子である。「初等音楽Ⅰ」の授業では、共通歌唱教材の学習と共に、二拍子と三拍子の指揮は学習しているが、六拍子にはふれていなかった。「地球星歌」は速度記号がAndanteであり付点四分音符がcirca66であることから、1拍ずつカウントする基本的な六拍子の振り方ではなく、大きな二つ振りである。二拍子の指揮では1拍目の打点のあとは右に跳ね上げるが、六拍子の二つ振りは横八の字を描くように左に跳ね上げる。同じ二つ振りでも四分音符を基準とする二拍子と、八分音符を基準とした六拍子の拍子感の違いを感じ取る必要がある。S教諭は指揮のフォームには慣れたが、指揮をしながら子ども達の歌をしっかりと聴く余裕がないという。指揮とは、音楽を形作り目指すべき歌の先導役であるため、合唱を聴きながらも次の音楽的表現を指揮で表さなければならない。異なる活動である「聴く」と「動く」を同時に行うには、リズムカノン¹等の経験を重ねることが助けになると考える。

・発声指導について

授業の一環として、外部の講師が合唱指導を行ったことがあり、S教諭は自分の指導との違いを痛感したという。講師は、身体表現を伴った大きな表現を使い、イメージやそれを表す言葉が非常に具体的であったという。高い声を出す時はS教諭は「巨人に頭をつかまれた感じ」と表現していたのに対して、「頭から下に声を落とす感じ」と身体表現しながら声を出す方向や場所を示したという。〈地球へと広がる〉ではS教諭が「とても広いんだよ」と声をかけたのに対して、講師は「どのくらい広いと思う？」と問いかけ、子ども達に考えさせ、講師自身も身体を使って大きさを示し、「ここから体育館の後ろまで」と声の広がりを実感できる空間を感じさせた。また、そのような声かけや指示だけでなく、一緒に歌い自分の声で広がりを実感させていた。先生自身が歌えることは、子ども達にとって本当に説得力があるのだと痛感したという。歌声だけでなく話し声も重要な表現手段であり、指導の声には、通る声・はっきりした声・生きいきした声など、声自体が持つ力が必要不可欠である。「ハモッているのに、おもしろくない」とS教諭が感じて

¹ リズムカノン：聴き取ったリズムを1小節遅れで手拍子等で再現する活動

いた合唱が、講師の指導によって口や目が開くようになり、想いが強く伝わる歌唱になったのは、このことも一因と考えられる。また、ハミング「m」は、唇を閉じて日本語の「ん」を発音した状態であり、響きのある声を作る手がかりとなる口腔が閉じやすく、音量的に聞き手に届けるのは6年生にとって難しいことであろう。講師からも、「u」の発音で声を出そうという指導があったという。楽譜にある情報をそのまま実践するだけでなく、全体の声のバランスを聴き、時にはそれに応じて最も効果的な歌唱方法を判断することも必要であろう。

・音楽表現指導について

S教諭は、まず楽譜を正確に歌うことについて、課題を挙げた。(楽譜4) 2番の〈かお〉の歌い出しがどうしても遅れるとのことだった。S教諭に同じ部分を歌ってみてもらうと、やはり、同様に遅れてしまっていた。1番と2番で歌詞が異なる場合、同じ節では言葉の割り振りや高低アクセントが日本語として不自然な場合がある。日本語の歌では、一文字一音が原則のため、文字数の増減に合わせ、音楽面でも音を増やしたり休符を加えたりすることがしばしば行われる。1番の〈遠い国の野原で 輝く虹に〉と2番の〈地球のみんなの 顔が見えるだろう〉は1番2番共に17音ではあるが、言葉の切れる位置が異なるため音楽を調整していると思われる。1番のままの旋律で2番を歌えば、八分休符に続いて一拍目に助詞の〈が〉を歌うことになり、〈が〉が強調され〈顔が〉の流れが途切れてしまう。そのため、〈顔が〉と一つの流れになるように5、6拍に〈かお〉が置かれているのであろう。そこで、〈かおがみえるだろう〉の言葉を大切にし、八分休符を休みではなくブレス（息継ぎ）だと捉え、「休む」から「息を継ぐ」意識に変えるよう助言した。

(楽譜 4)

S教諭はCDを何度も聴き、この部分のタイミングはわかっているつもりだった。しかし、聴くだけでは不十分で、楽譜から様々な情報を得て、演奏の根拠を見つけることで読譜や表現が大きく変わるということに気付いたとのことだった。

(楽譜 5)

45小節目からはそれまでの曲調と異なり、マイナーコードの伴奏にのせて緊張感のある旋律を歌う部分である。(楽譜5)

S教諭は、mpで小さく歌うよう指導しているが、イメージするmpの表現になっていないとのことだった。歌の強弱は単なる音量の違いではなく、息のスピードや発音の明瞭度も含まれた表現の強弱である。〈てで〉の柔らかなスラーの表現で小さな手の頼りなさを表現し、八分休符が緊張感のある次のフレーズの始まりを生み出している。そのことから、内緒話をするように言葉を大切に発音し、休符で息を詰めるように歌ってみてはと助言した。

「地球聖歌」は流れるような八分の六拍子で、転調とユニゾンによる歌唱がこの歌の山場を生み出している。(楽譜6)

(楽譜 6)

イ長調から変ロ長調へ短二度高くなり、転調した高揚感のまま、次の〈そう！だれにでもあいするひとがいる～〉と最初のフレーズがユニゾンで再現される。それまでの二部合唱から斉唱へと変わること、音楽の厚みは減少するかもしれないが、全員が同じ音で歌うからこそ、歌詞に込めた思いを伝える力が高まると考えられる。伴奏の低音部もそれまでのリズムパターンと違って力強さが増している。S教諭が〈そう！〉や〈さあ！〉などの感嘆詞をどのように歌うかを子ども達に問いかけると、決意や呼びかけなどの回答があったと言う。流れるような八分の六拍子のメロディーでも、言葉を言い直したり強調したりすることで強い表現が生まれる。このように、音楽と言葉の両面から楽譜を見ることで様々な手がかりを得ることができる。楽譜から音楽を読

み取るための基礎的な音楽知識や言葉と音楽の関わりについて気付くことが必要である。

4. おわりに

本研究では、S教諭へのインタビューと「初等音楽Ⅰ」の授業内容の振り返りから、歌唱指導の改善に生かせるポイントを考察した。

一つ目は音楽的な知識・技能の修得である。まず、S教諭が最も不安を感じていた指揮である。合唱をまとめ音楽を作り上げる過程で、指揮は拍や速度を示すだけでなく、音楽的な表現を先導する役割がある。指揮者役を決め共通歌唱教材を歌う授業での活動は引き続き行い、他の教材でも学生が指揮をする機会を増やし、レガートやスタッカートなどのアーティキュレーションや、ダイナミクスの違いを体験できるようにしたい。加えて、指揮が身体活動であると捉え、手拍子やボディーパーカッション、簡単な身体表現など、音楽と共に身体を動かす現在の活動も継続させ、「聴く」と「動く」活動を同時に行うリズムカノン等を取り入れたい。今回の合唱曲は、S教諭にとって初めての八分の六拍子の指揮であった。授業では二拍子や三拍子以外の拍子に触れておくことも必要だろう。教育芸術社「小学校の音楽1～6年」掲載の、5年生「小さな鳥の小さな夢」(星梨津子 作詞・佐井孝彰 作曲)、6年生「きっと届ける」(長井理佳 作詞・長谷部匡俊 作曲)「仰げば尊し」(作詞・作曲者不明)、4年生「みかんの花さくおか」(歌詞のみ掲載)や、幼児期に歌っていると思われる「あめふりくまのこ」(鶴見正夫 作詞・湯山 昭 作曲)や「思いのアルバム」(増子とし 作詞・本多鉄磨 作曲)などを通して、八分の六拍子にふれることも検討したい。次に、自身の歌唱力の向上である。外部講師が自身の声を使って、伸びのある声の出し方を指導していたことに触れ、自分が伸びやかに、豊かな声で歌えることが必要だと痛感したという。授業では発声練習として「おなかの体操」や「早口言葉の歌」「あかさたな」、そのほか既習の教材を用いている。過度な母音唱が日本語を損なう恐れがあることや、機械的な発声練習が歌唱への意欲減退にならないよう、楽しく声を出し、日本語の発音を重視した発声練習に偏る傾向があった。今後は豊かな響きを習得できるよう、母音やロングトーンも用いた発声練習の改善にも取り組みたい。さらには、楽譜から音楽を読み取る力である。音楽的には、音符や記号、楽語から正確に読譜し、旋律の流れや音楽の形式などから歌の全貌をつかむ。言葉の面では歌詞を読み込み、それが音楽とどのように関わっているかを言葉のアクセントやイントネーション、意味から考察する。CDの模範演奏を聴き取って歌うだけでなく、これらを分析し理解を深めることで歌い方や強弱が変化し、表現が大きく変わるとS教諭は話していた。まずは、音楽と言葉の面から曲中の最も山場となる部分を見つける事から始め、表現について意見交換する機会を多く設定したい。

二つ目は教諭としての表現力である。外部講師の指導から、S教諭はこの必要性を強く感じていた。豊かな身体表現を伴った講師の指導は、子ども達の口や目の開け方を変え、楽しそうな歌唱へと導いたという。自分の身体を隅々までコントロールし、イメージどおりに身体を使うことができる力が求められる。グループで劇や音楽を用いたパフォーマンスを発表し合う「子ども表現実践演習」等の授業も含め、様々な授業を通して身体表現能力の向上を図ることが必要ではないだろうか。また、伝えるための豊かな語彙が必要である。イメージを具体化できる言葉の選択

だけでなく、その場面にふさわしい声量や速度、明瞭度を持った声の使い方を指導することも重要である。今後は、学生への問いかけをより積極的に行い、発声や音楽に対して、学生自身が思いを言語化し発言する機会を増やしたい。

今回S教諭から、小学校での合唱指導の現状や課題について、貴重なお話をうかがうことができた。大学時代に、共通歌唱教材の言葉の解釈や音楽の成り立ちを学んだことやグループ合唱で歌う楽しさを知ったこと、発声練習が楽しかったことなどが、S教諭の音楽に対する意欲や指導に生かされていることを知ることができたのは、大変有意義であった。心から御礼申し上げる。

参考文献

- 1) 坂本久美子, “小学校教員養成における歌唱指導の考察(1)”, 山口学芸大学研究第9号, 2018.
- 2) 豊島久美子 服部安里 福井 一, “小学校の合唱と教員養成－特別活動を中心に－”, 大阪樟蔭女子大学研究紀要第7巻, 2017.
- 3) 藍川 由美, 日本語を歌おう! 藍川メソッド, カワイ出版, 2007.
- 4) 日本語発音アクセント辞典, NHK 放送文化研究所・編, 1998.
- 5) 竹内 秀男, 変声期と合唱指導のエッセンス, 教育出版, 2009.
- 6) 富澤 裕 編曲, COSMOS ミマス作品集, 音楽之友社, 2013.